

■ 書評 ■

『共生細菌の世界』

成田聡子著, 東海大学出版会, 2011年6月5日, 156頁, 本体価格2000円

まず、「やる気のない学生が研究者に!?!」というこの本の帯に記された一文は、とにかく目を惹いた。どの程度「やる気」が無かったのかを具体的にお知りになりたい方は、第2章冒頭、数頁にわたり記されている。評者は「あちら側」の（しかも同じ農学系）現役大学教員なので、著者の教員のご立腹は容易に想像し得た。しかし、彼女が指摘したように「大学の授業も、高校の授業と似たり寄ったり」（p.32）では、退屈なのは当然。高校時代にせっかく芽生えた知的興奮の喜びが萎えたということなのであろう。著者には、是非とも、大学の教員となって頂き、しかも、大学の意志決定を左右するくらいにまで上り詰め、トップダウンで変えて欲しい。

無論、その過程は熾烈な戦いの連続。生き残るには優れた武器が必要である。それが、公表論文である。第3章に未公表扱いの卒業論文・修士論文との明確な比較を行い、publishの重要性を論じている。もちろん、数多の高品質の公表論文をものにするには時間とお金がいる。仙人ではないので、霞を食べて生きていくわけにはいかない。つまり、研究をしながら自活しなければならない。研究費も膨大である。生活費や競争的な研究費を得るための具体的なノウハウを、実況中継に近い形で第7章に詳述されている。以上のように、本論とは直接関連しない3つの章に、リフォームの動機である不満足を大学初等教育に感じ、そのために「やる気のなかった」著者が、ご自身の研究を武器に、大学の内側から立て直すという宣言が読み取れた。著者は若く才気溢れ、それ以上に、不満の塊なので、きっと成就するだろう。その際に、刺激的なこの続編が編み出されよう。期待したい。

さて、評者は獣医寄生虫病学が専門であることから、本書の残り4章分の内容が参考になった。基本的には、著者の研究モデルであるキチョウ *Eurema* 属の2種とその体内に共生する細菌ボル

バキア (α -プロテオバクテリア) の共進化現象を紹介するものであった。この現象は獣医学でも関連し、たとえば最近のイヌ糸状虫症（市井動物病院で獣医師や畜主さん達に膾炙される「フィラリヤ」のこと）の治療では、共生細菌ボルバキアを抗生物質でたたく手法が北米で行われている。本書でもヒトのフィラリア症についてp.16からp.17に記されていたが、獣医学（とくに伴侶動物医学）領域でも同様である。また、外部寄生虫として問題視されるシラミ類には γ -プロテオバクテリアが相利共生をするので（p.6）、これをたたくと、このやっかいな昆虫を退治できるかも知れない。ところで、以前、この著者が勤務された研究所に評者が野生種や家畜から得たシラミ類をお送りしたことがある。しかし、血液を吸わない体毛・羽毛を食べるハジラミ類にも共生細菌がいることに驚いた。次回からはハジラミ類もお送りしよう。

ミツバチの疾病予防は国が特殊な法律（家畜伝染病予防法）を作り、家畜保健所の獣医師がその検疫や防疫に活躍している。そのような背景では、とくに第5章の奇形や大量死の惹起、次の章の性比の偏向などは昆虫医学を新興させる起爆剤となるだろう。もちろん、その応用は、希少昆虫の疾病調査や愛玩用昆虫の健康保持にもつながっていく。著者は、「はじめに」において「生活に何の役にも立たないことを当初から薄々感じていた」と宣言し、研究費を獲得するために「こういった研究をすると（中略）金の卵を生む可能性があります」（p.127）という「やけくそ」的な申請書を書くことがあると述べた。評者には、しかし、リアルに未来のある学問領域に身を置いていると思う。が、おそらく、著者は「そういうことではないよ」と、すかさず反論しそうだが。

(浅川満彦/酪農学園大学)